

視察報告「自治体（教育委員会）・学校の特色ある取組」

【視察 1：教育支援センターを中核にしたアウトリーチ支援】 A 村、B 村

○支援の状況

- ・ A 村の教育支援センターでは、利用する児童生徒全 5 名のうち中学生 2 名に対し、ICT 等を活用した支援を実施。教育支援センター（指導員）と不登校生徒自宅（一人一台端末）とを ICT でつなぎ、通室生と一緒にオンライン学習をしたり、指導員によるリモート授業を受けたりしている。その際、ICT 支援員も機器設定等のバックアップをしている。
- ・ 自宅での ICT を活用した学習について出席扱いになるように進めている。出席扱いとするために、取り組んだ課題を送ってもらう等の形態を検討。
- ・ B 村では、子どもや保護者等が気軽に集まり利用できる施設を設置。不登校児童生徒が日中の時間帯を自由に過ごすことが可能。現在、日中の利用は中学生 1 名。この施設は第三の居場所であり、やりたいことを実現できる場。地域おこし協力隊員等による多様な体験活動を準備している。
- ・ B 村では、A 村教育支援センターとの連携を検討中。オンラインで A 村教育支援センターとつながることや、B 村施設のスタッフが学習支援を行うことを検討。

【視察 2：学校とフリースクール間でのタイムリーな情報共有】 中野市立 C 小学校

○支援の状況

- ・ フリースクールに通う児童の様子や取り組んだ活動について、学校とフリースクールとの間で、スプレッドシート（クラウド上のファイル）を活用し、学習（過ごし方）状況と出欠表の状況について共有している。学校側からメッセージを送ることも可能で、双方向のやり取りができる。
- ・ フリースクール側から送られた情報は、原学級担任、特別支援学級担任、管理職で共有。学校外のフリースクールでの様子を知ることができることで、家庭訪問や家庭への電話連絡の際には本児童や保護者との会話がはずむ。良好な関係を維持することができている。
- ・ 1 学期通知票では、フリースクールにおける活動で学校が把握できた日数について出席扱いとした。やり取りしているスプレッドシートは、当該児童の様子について知ることのできる便利なツールとなっているが、学習内容の詳細や具体まで把握することが難しく、学習を含めたその他の評価は今後の検討事項であると考えている。

【視察3：フリースクールと連携し、個別最適な学びを支援】長野市立D中学校

○支援の状況

- ・特別支援学級を含めた既存の学校の支援のあり方に対し、不適応・苦しさを示す生徒の存在。職員自身が支援のあり方を考え直す機会とも捉え、その子の最善の利益となる支援のあり方を模索した。
- ・当該生徒の出身小学校との連携を検討し、小学校職員の理解を得て小学校での職場体験を毎週1日実施。また担任や学校長による家庭訪問等、保護者との信頼関係構築に努め、その上でフリースクールの活用を提案し保護者の承諾を得る。
- ・フリースクール担当者、保護者、学校職員にて、フリースクールに通うにあたり共通理解すべきことを共有し、週3日フリースクールを利用（残りの週2日は中学校登校と小学校職場体験学習）する体制を整える。
- ・1か月に1回の頻度にて、フリースクールより当該生徒の学習の様子、活動内容等が学校側へ送付。当該生徒の学習内容は本来の学習すべき内容とかけ離れているため、指導要録は全教科アスタリスクとなるが、総合所見に頑張りの姿を記入。精一杯に取り組む姿を捉え評価することに努めている。
- ・評価する材料が無いから評価できないではなく、評価をつけてあげられるように指導・支援するのが教師の役割であることを校内で確認。教室で学ぶことができなくとも、可能な限り成績・評価をつけるような体制を目指していく。

【視察4：民間施設での学びの評価の取組】塩尻市立E中学校

○支援の状況

- ・民間施設を居場所とする生徒に対し、保護者の願いをもとに「どうやったら評定をつけられるか」を考えた。評価材料がそろえば評価が可能であることを確認し、各教科担任は学習評価の3観点に従った学習カードを用意。支援者と学習カードを活用した学習の実施について打合せを実施。また、ビデオ視聴を通し実験の考察を記入できるよう支援したり、放課後登校した際にリスニングテストを行う等の支援を実施。
- ・生徒は民間施設でオンライン教材や学習カードを利用した学習に取り組み、意欲的な姿で生活することができている。
- ・教科担任と支援者で定期的に連絡を取り合い、作品づくり等の途中経過等について情報交換を行う。結果的に、5教科+美術の評定がつく。
- ・保護者は、評定がついたことに対し、“人としての尊厳を認めてもらえた”と感謝していた。
- ・一人ひとりの生徒を大切にするという教育観に基づき、校内中間教室、リモート学習の生徒に対しても、希望があれば可能な限り評定をつけてられるよう支援していく。
- ・不登校生徒の保護者には、アスタリスクが受験において不利であるとは必ずしも言えないことを説明している。

【視察 5：校内フリースクールを設置し、個別最適な学びを支援】 上伊那郡 F 中学校

○支援の状況

- ・校内中間教室とは異なり、学級復帰を前提とはせずに個の願いに寄り添う「校内フリースクール」の位置づけで F 組を設置。12～13 名が在籍。F 組担任が終日専属にて勤務。校内の委員会にて、生徒の様子を学級担任と毎週共有している。
- ・F 組を利用する生徒の特性等に配慮し、外から直接入室できるような場所を準備し、学習に向かいたい気持ちのある生徒と自分のペースでやりたいことをやる生徒とでスペースを 2 室に分けている。
- ・教室に Web カメラを設置し、原学級の授業視聴ができるような環境を整備。
- ・F 組は学習がメインではない実態から評価・評定の難しさを感じているが、数学を起点に観点別学習状況評価の実施に向けスタートを切っている。

【視察 6：校内フリースクールを設置し、個別最適な学びを支援】 上田市立 G 中学校

○支援の状況

- ・学校へ行きづらさを感じている生徒の居場所となるよう、校内フリースクール「サポートルーム」を今年度 4 月に開設。教室らしくない部屋、誰もが居心地の良い場所をコンセプトとしている。
- ・教室らしくない雰囲気を出すため、ソファや絨毯、金魚が泳ぐ大きな水槽、パーティションで仕切られたスペース、卓球台にもなる大きな机等を設置。他の生徒と顔をあわせることなく入室できるよう、場所や動線にも配慮。
- ・なぜ「サポートルーム」が必要なのか、校長先生自らが他の職員に想いを伝え、他県の校内フリースクールの様子を紹介すること等を通して、設置に向け理解を得た。4 月始業式で全校生徒に、PTA 総会で保護者に、新入生説明会では入学予定の小学 6 年生と保護者に対し、サポートルームの意義と願いを伝えた。
- ・サポートルームの担当職員には、学級経営、教科指導、保護者対応等、適切な指導・対応ができるミドルリーダーの職員を配置。これまでに経験の無い新たなチャレンジであり、突然の対応が必要となることが予想されることから、信頼が厚い職員の配置を絶対の条件と考えた。
- ・生徒個々の自己決定を大切に、生徒一人ひとりが最適なゴールを自分で目指し、自立していくためのサポートに努めている。滞在時間内に何を行うか、生徒自身がホワイトボードに記入し予定を立て、学習をする、オンラインで授業に参加する、自分の好きなことをやる等、自分のペースで過ごすことが生徒の安心感につながっている。
- ・サポートルームの取組は、「一人ひとりの生徒を大事にしていく」学校・教師の姿勢を表すと同時に、教職員が今までの当たり前を見直す機会にもなっている。